

ベランダバードウォッチ 18 年冬報告 — 18 年冬は冬鳥が少なかった？ —

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

早くもサクラの季節の到来です。住宅地の上空にはツバメが飛び交い、植え込みからウグイスの長閑なさえずりが聞こえてきます。冬を日本で過ごしたツグミやシロハラも、暖かな日差しの元、さえずりの練習に余念がありません。18 年冬は、12 月下旬に北海道などで大雪があったものの、東日本や西日本では寒気の影響が少なく暖冬でした。このような、暖かな冬は身近な冬鳥の生息状況にどう影響したのでしょうか。18 年冬の身近な鳥たちの生息状況を、ベランダバードウォッチの結果をもとに以下に報告します。

調査状況

18 年冬は、北海道から九州までの 55 名の方によって、家での調査 29 か所、家の周りの調査 53 か所で調査されました。調査地数は、両調査とも 17 年冬よりわずかに増加しましたが、家での調査はやはり家の周りの調査より少ないままでした (図 1)。また、調査地を北日本・東日本・西日本の 3 区分に分類すると、今回も東日本が著しく多く、両調査合わせた 82 か所のうち 78% を占めました。さらに、今回も北海道や東北地方からは参加者が少なく、両調査合わせて 1 か所でした。やはり、冬の調査は、積雪の多い地域や寒さが厳しい地域では定期的に行なうのが難しいのかもしれない。

記録種と記録率

2018 年 10 月から 2019 年 2 月末 (家での調査は 12 月から) までに記録された種は家での調査は 52 種、家の周りは 115 種、合計 115 種でした (附表)。今冬も家の周りの調査で多くの種が記録されました。家の周りの調査は、10 月から調査期間となるため、キビタキやコサメビタキ、カッコウ類などの夏鳥も含まれています。また、家の周りの調査は、家の調査よりも多様な環境を含むため、今回も湖沼や河川などの水辺の鳥や猛禽類なども多く記録されました。

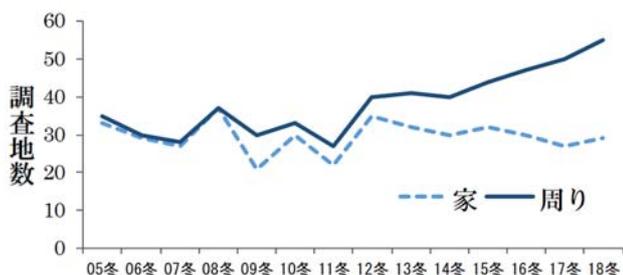


図 1. ベランダバードウォッチ冬の調査の調査地数

冬鳥の記録状況

まず、代表的な身近な冬鳥のツグミ、ジョウビタキ、シメの記録率を 15 年冬から 18 年冬の 4 シーズンと比較してみました (図 2)。記録率は、12 月から 2 月末 (家) および 10 月から 2 月末 (家の周り) の各調査地の記録回数の合計を全調査回数で除した値です。ツグミの 18 年冬の記録率は、どちらの調査でも 4 シーズンの中で最も低いことが分かりました。17 年冬までは 0.3 (家) や 0.5 以上 (周り) だったのが、18 年冬ではそれぞれ 0.16 や 0.34 でした。ジョウビタキは、家の調査では 17 年冬よりわずかに高かったものの、16 年冬や 15 年冬より低い記録率でした。家の周りの調査では、ツグミと同様にそれまでの 3 冬に比べて著しく低い記録率でした。一方、シメの記録率は、どちらの調査も 17 年冬より高く、15 年冬や 16 年冬とほぼ同じでした。

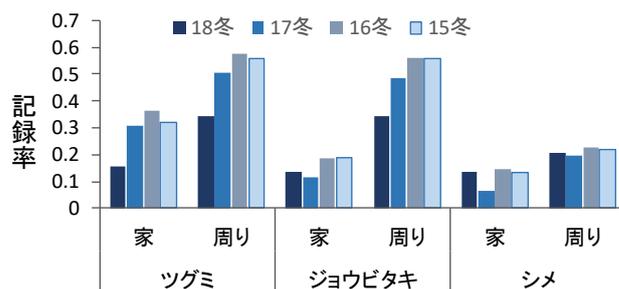


図 2. 身近な冬鳥 3 種の記録率の 4 シーズンの比較

次に、家の周りの調査から、ツグミ、ジョウビタキ、シメ、シロハラの渡来初期から冬の終盤にかけての記録率の季節変動を 17 年冬と 18 年冬で比較しました (図 3)。解析に用いた調査地は、調査期間を通して両年とも調査がおおむね実施された 21 か所です。4 種のうち、シメを除く 3 種は 17 年冬と比べて 18 年冬の記録率は、冬をとおして全体に低い傾向がありました。ツグミ

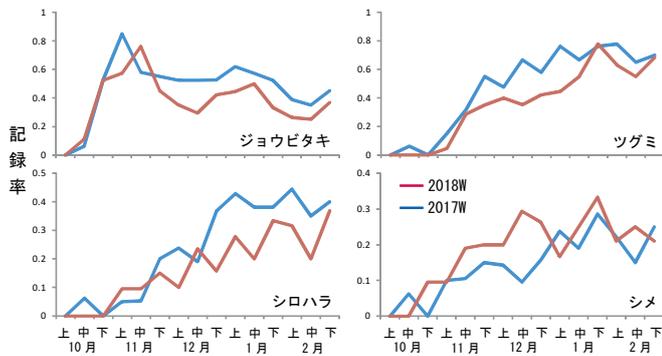


図3. 家の周りの調査による冬鳥4種の記録率の季節変動

では11月下旬から1月上旬の記録率が低く、1月下旬に17年冬より一時的に高くなったものの、その後も17年冬より低くなりました。ただし、2月には両年の差は少なくなりました。18年冬のジョウビタキの記録率は、17年冬より10日遅い11月中旬にピークに達したのち、17年冬より全体的に低い傾向にありました。記録率が前2種に比べて低いシロハラも、同様な傾向があることが見てとれます。一方、シメは、前述の全データを用いた記録率と同様に、記録率の季節変化も17年冬に比べて高い傾向がありました。したがって、同じ調査地を用いた記録率の比較でも全調査地での記録率でも主要な冬鳥の記録率は同じ傾向があることが分かりました。

17年冬と比較したツグミの記録個体数

記録率が低かった種は、やはり個体数自体が前年に比べて少なかったのでしょうか。そこで、ツグミの記録個体数を両年で比較しました。ツグミは、住宅地の公園などにも複数の個体が記録されます。そのため、ツグミはなわばりを占有するジョウビタキなどより調査地での個体数が多く記録され、年による違いが得られやすいと考えられます。

まず、家の周りの調査の17年冬と18年冬の個体数ランクの季節変動を前出の21か所の調査地で解析しました。家の周りの調査は、個体数の多寡を6段階の概数で報告します。しかし、このうち「時々いる」は個体数を表したものでないので解析から除外しました。また、個体数ランクはばらつきを軽減するために、1~2羽と3~5羽を統合して1~5羽、6~20羽、21羽以上の3段階で表しました。その結果、18年冬のツグミの個体数ランクは、11月中旬から1月中旬にかけて1~5羽

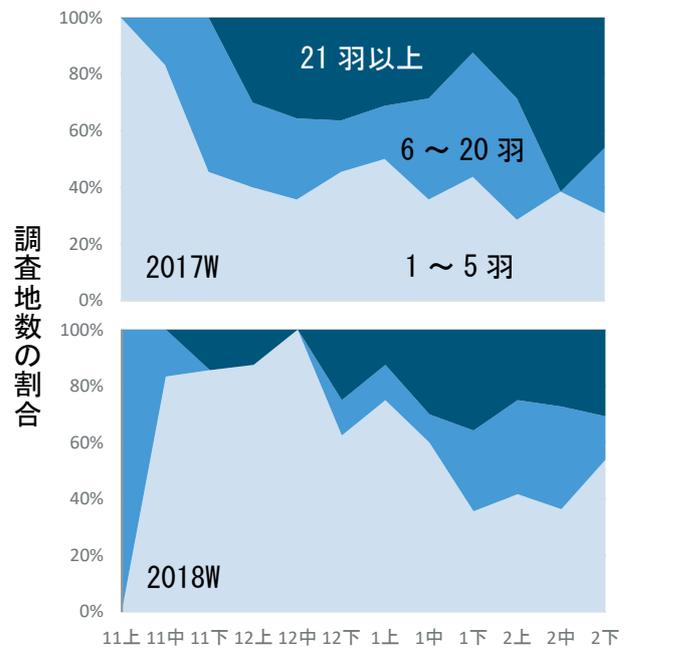


図4. 家の周りの調査による同じ調査での17年冬と18年冬の個体数ランクの季節変動

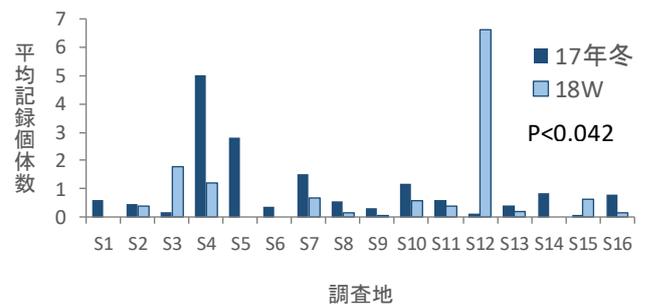


図5. 家での調査の同じ調査地でのツグミの平均個体数の過去2年の比較

のランクの調査地数が17年冬より多い一方で、個体数が多いランクの調査地数の割合が少ないという明確な傾向がありました(図4)。ただし、1月下旬以降には、個体数ランクの多い調査地数の割合が増えてきました。

さらに、家での調査地でツグミの記録個体数を17年冬と18年冬で比較してみました。解析には両年とも同じ16か所の調査地を用い、各調査地の平均個体数を比較しました(図5)。その結果、18年冬と17年冬を比較すると、17年冬の平均個体数が多い調査地は13か所あり、有意に18年冬より平均記録個体数が多いことが分かりました(Wilcoxon符号付順位検定, $P < 0.05$)。

したがって、18年冬のツグミは、家での調査でも家の周りの調査でも17年冬より記録個体数が少なかったと言えます。個体数が少なかったことで、記録率も低かったのかもしれませんが。

おわりに

以上のように、18年冬のツグミやジョウビタキ、シロハラは記録率は17年冬などと比べると低い傾向がありました。このうち、ツグミでは個体数ランクや平均個体数でも17年冬より少ない調査地が多いことが分かりました。特にその傾向は、初冬季から1月中旬ごろに顕著でした。2018年の12月下旬には北海道などでは大雪が降りましたが、太平洋側は暖かな冬でした。18年冬の冬鳥の記録率が低かったのは、18年の初冬季の気温の高さと関係しているのかもしれませんが。ツグミは渡来直後は山地の森林などで採食し、降雪などにより標高の低い里地に降りてきます。関東などの東日本や太平洋側の山地では、暖冬のために積雪が少なく、遅くまで山地にとどまっていたのではないのでしょうか。おそらくシロハラなども同じような理由により、今冬は少なかったと考えられます。さらに、18年冬のジョウビタキの記録率のピークが17年冬より10日ほど遅かったのも、山地や北日本の降雪が遅かったためかもしれません。一方、シメはツグミやジョウビタキ、シロハラより17年冬に比べて記録率が高い傾向が得られました。シメの冬の主要な食物は、植物やニレやカエデ類などの樹木の種子です。樹木の種子は年によって豊凶が変動します。とすると、18年冬は木の実が豊作だったのかもしれませんが。冬鳥の記録状況と冬季の気象状況との関係や木の実のなり具合との関係を明確にするためにも、もっと多くの調査地のデータを長年にわたって記録する必要があります。それとともに、樹木の種子の豊凶の記録をとることも必要です。ちなみに、北関東の宇都宮市一帯の公園では、カエデの種子は不作でしたが、ケヤキの種子は豊作でした。そのため、住宅地の小さな公園でもケヤキの実を食べるシメやアトリが冬の間観察されました。身近な鳥たちの生息状況の経年的な変動を明らかにする上でも、今後とも、ベランダバードウォッチへの継続した参加をお願いいたします。

なお、お送りいただいたデータを集計していて気づいた点があります。家の周りの調査は、季節変動を解析するために10月から2月末までの結果を10日ごとに報告します。ところが、家での調査と同じように、調査日ごとに結果を報告されている方が時折いらっしゃいます。データの集計に使用しているソフトウェアの関係で、せっかく調査をしていただいても季節変動など

一部の解析に反映されない場合があります。貴重なデータですので、調査方法など今一度ご確認いただけましたら幸いです。

この報告書がお手元に届くころは、夏の調査が始まっているころと思われます。身近な環境での繁殖期の調査は、冬季の調査に比べて変化が少なく、わくわくするような違いが得られにくい傾向があります。しかし、長い年月にわたって同じ方法で同じ時期に調査をすることで、鳥たちの変動を知ることができます。ぜひ、繁殖期の調査も継続してご参加いただけましたら嬉しい限りです。末尾ながら、ご参加いただいた皆様のご芳名を記してお礼にかえさせていただきます。

青木一志・秋元玲子・五十嵐洋二・石口富實枝・石田健・石原渉・井田奈緒子・入舩憲一・sk_attack・大出水幹男・大下陽平・大塚啓子・岡本美紗・沖田絵麻・加藤美奈子・川畑紘・黒沢令子・小荷田行男・小林俊子・小堀脩男・坂田樹美・笹倉ちえか・佐藤華音・佐藤司・佐藤留美子・白石ひとみ・須田由美・大門明美・大門聖・高橋布美子・高橋雅子・高橋佳子・高山裕子・武居佳子・竹内敦子・竹内江利子・武谷由紀子・辰巳文吾・田中利彦・塚島律子・時田賢一・長嶋宏之・西川光一・丹羽和夫・広友詞子・藤原淳子・古川紀美子・星野大剛・松平晶子・三田長久・宮崎朋子・宮澤絵里・安田耕治・山口誠治・吉中康展・吉邨隆資・渡邊ケイコの各氏。

とりまとめ：平野敏明



付表. 2018年冬の記録種一覧

No	種名	家	周り	No	種名	家	周り	No	種名	家	周り
1	キジ	○	○	40	ツミ		○	79	ミソサザイ		○
2	オシドリ		○	41	ハイタカ	○	○	80	ギンムクドリ		○
3	オカヨシガモ		○	42	オオタカ	○	○	81	ムクドリ	○	○
4	ヨシガモ		○	43	サシバ		○	82	トラツグミ		○
5	ヒドリガモ		○	44	ノスリ		○	83	マミチャジナイ		○
6	マガモ	○	○	45	フクロウ		○	84	シロハラ	○	○
7	カルガモ	○	○	46	カワセミ	○	○	85	アカハラ		○
8	ハシビロガモ		○	47	コゲラ	○	○	86	ツグミ	○	○
9	オナガガモ		○	48	アカゲラ	○	○	87	ルリビタキ		○
10	コガモ	○	○	49	アオゲラ	○	○	88	ジョウビタキ	○	○
11	ホシハジロ		○	50	チョウゲンボウ	○	○	89	ノビタキ		○
12	キンクロハジロ		○	51	ハヤブサ		○	90	イソヒヨドリ	○	○
13	カイツブリ	○	○	52	モズ	○	○	91	エゾビタキ		○
14	キジバト	○	○	53	カケス	○	○	92	コサメビタキ		○
15	カワウ	○	○	54	オナガ	○	○	93	キビタキ		○
16	ゴイサギ		○	55	カササギ		○	94	スズメ	○	○
17	アオサギ	○	○	56	ミヤマガラス		○	95	キセキレイ	○	○
18	ダイサギ	○	○	57	ハシボソガラス	○	○	96	ハクセキレイ	○	○
19	チュウサギ		○	58	ハシブトガラス	○	○	97	セグロセキレイ	○	○
20	コサギ	○	○	59	キクイタダキ		○	98	ビンズイ	○	○
21	クイナ		○	60	ハシブトガラ		○	99	タヒバリ		○
22	ヒクイナ		○	61	ヤマガラ	○	○	100	アトリ	○	○
23	バン		○	62	ヒガラ		○	101	カワラヒワ	○	○
24	オオバン	○	○	63	シジュウカラ	○	○	102	ベニマシコ		○
25	ホトトギス		○	64	ヒバリ	○	○	103	シメ	○	○
26	ツツドリ		○	65	ツバメ	○	○	104	イカル	○	○
27	ケリ		○	66	コシアカツバメ		○	105	ホオジロ	○	○
28	イカルチドリ		○	67	イワツバメ		○	106	ホオアカ		○
29	コチドリ		○	68	ヒヨドリ	○	○	107	カシラダカ	○	○
30	タシギ		○	69	ウグイス	○	○	108	ミヤマホオジロ		○
31	ツルシギ		○	70	エナガ	○	○	109	アオジ	○	○
32	クサシギ		○	71	オオムシクイ		○	110	クロジ		○
33	イソシギ		○	72	エゾムシクイ		○	111	オオジュリン		○
34	ユリカモメ		○	73	センダイムシクイ		○	112	コジュケイ	○	○
35	セグロカモメ		○	74	メジロ	○	○	113	ドバト	○	○
36	ミサゴ		○	75	セツカ		○	114	ホンセイインコ	○	○
37	ハチクマ		○	76	キレンジャク		○	115	ガビチョウ		○
38	トビ	○	○	77	ゴジュウカラ		○		合計	52	115
39	チュウヒ		○	78	キバシリ		○				